

一鶴ヶ島プロジェクト

住民の高齢化と公共施設の老朽化を背景とした
公共と民間の連携による集団設計手法の開発と実践

藤村龍至

(東洋大学建築学科専任講師)

公共と民間が連携して老朽化を乗り切る

埼玉県鶴ヶ島市は東武東上線池袋駅より40分ほどの郊外に位置する人口7万人の市である。1970年代に郊外住宅地として人口が急増したが、現在では人口の流入は少なくなり、住民の高齢化が進んでいる。また1970年代に急速に整備された公共施設群は一斉に老朽化しているが、住民の高齢化により財政難が予測されるなか、統廃合を含めた公共施設のあり方が模索されようとしていた。

東洋大学理工学部建築学科では2011年より、鶴ヶ島市と協力しこの問題に取り組んできた。学生たちは市の公開情報をもとに財政分析や他の自治体の先行事例を調査し、それをもとに市内に現存する鶴ヶ島第二小学校(約6,400㎡)とそれに隣接する南公民館(約2,000㎡)を複合化し、管理部門の共有や多目的化によって面積を75%程度に圧縮した施設計画案の作成を行った。単なる面積の圧縮だけでなく、新しい教育の実践や多様な市民活動など今日的な課題にも応える内容とした。

計画案の作成は実際に施設を利用する「地域支えあい協議会」を中心とする住民と、小学校の空き教室を利用した「パブリックミーティング」を開催し、公開で行われた。



図1 パブリック・ミーティング

学生の提示する9案に対し投票を行う公開ミーティング
住民とともに合計5回開催し、案を発展・淘汰させた

パブリックミーティング：住民の投票とコメント

「パブリックミーティング」は2012年4月から7月に掛けて、2週間に1回、合計5回にわたって開催した。毎回のミーティングでは予め選抜された設計案9案がプレゼンテーションされ、それらに対し住民が投票を行い、上位4案がワークショップへ進み、意見交換を経て最終1案を決定する、という手順で行われた。毎回作成された投票結果のランキングの結果をもとに学生は次回の提案を作成し、住民のニーズを汲み取っていった。



図2 住民の投票と意見交換

毎回選抜9組がプレゼ、上位4組がワークショップへ進出
ワークショップでの意見交換を経て最終1位を決定

模型を用いて設計プロセスを見える化

設計案の検討に際してはいくつかのルールを定めた。まず設計作業を進める際に毎週1回、案を更新することに必ず模型を作成すること、ひとつの案を更新しながら漸進的に発展させることなどである。模型の縮尺はスイスで公共施設の住民投票に用いられる1/500の縮尺を採用し、同じ縮尺で検討することとした。

これにより、案を発展させてきたプロセスを常に見える化することができ、設計者以外の者にとっても、なぜそのような形態を採るに至ったのか理由を理解し議論に参加しやすくなった。

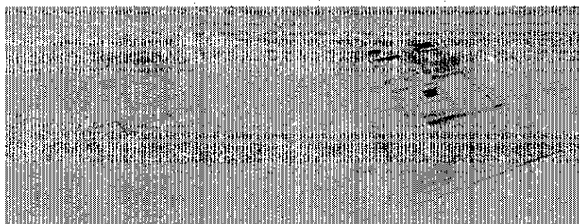
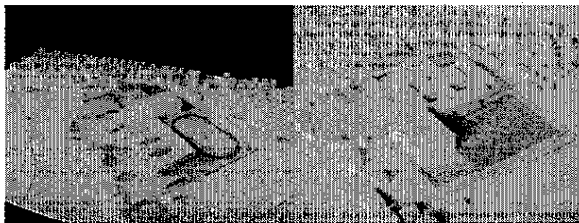


図5 住民のコメントを受け、発展する1/500模型(左上から右下へ)

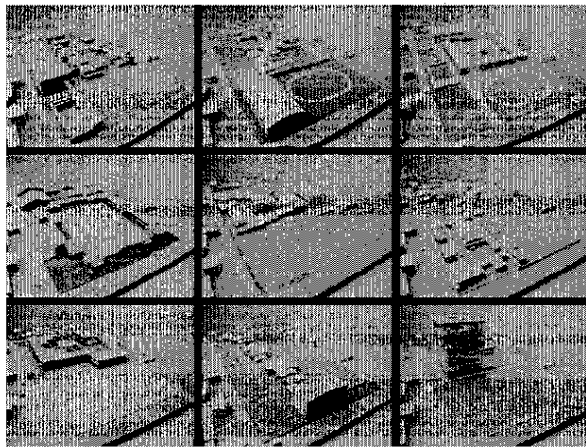


図6 繰り返しの投票の結果選ばれた最終9案の1/200模型。ニーズを汲み取りながらバリエーションが浮かび上がる

複数案に複数回コメントする機会を提供

これまでも設計案が概ね完成した段階で住民に案が公開され、コメントを募集する事例はあったが、設計の初期段階から公開され、毎回複数の案が提示され、住民のコメントを反映させていく形式が本プロジェクトの特徴である。

5回にわたって繰り返される投票には住民の主体的な参加を促す効果があり、最初は耐震性や耐久性など技術的な不安などに集中していた意見も、次第に使い方についてのポジティブな議論へと展開していった。毎回、市の財政見通しなどの情報も積極的に提供され、双方が一方向的に要求するだけでなく、受益と負担のバランスを理解し、共に考えていく雰囲気醸成される効果があった。



図7 藤縄市長、市議会議員、市民など、200人が集まった「最終パブリック・ミーティング」(7月18日)

マスコミ各社の反応

藤縄善朗鶴ヶ島市長や外部の建築家を招いて行われたパブリックミーティングの最終回には約200名の市民、市議会議員、市外からの見学者、学生が集まり、住民たちに繰り返しランキングされ、進化を続けた最終9案に最後の投票を行った。会場には周辺自治体や文部科学省の職員など行政関係者の見学する様子も見られた。ワークショップ、講評会の様子は既に東京新聞、毎日新聞、読売新聞に掲載された。成果物は鶴ヶ島市役所1階ロビーにて展示され、広く市民に成果を発信した。

2012年12月3日から8日にかけて、東急電鉄の協力を得て「渋谷ヒカリエ」にて巡回展、トークイベントを行い、3,600人の来場者を集めた。

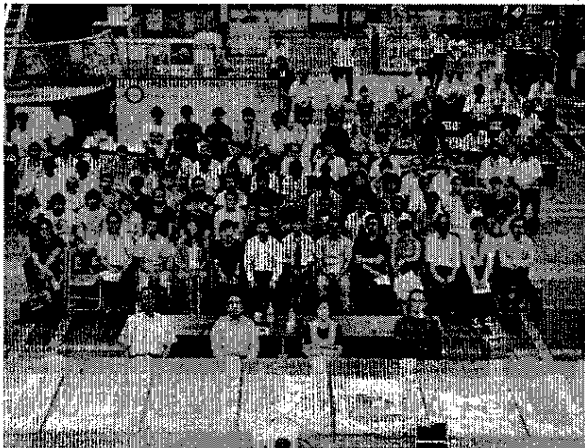


図8 鶴ヶ島市役所1階ロビーにて行われた展覧会

「公共建築から鶴ヶ島の将来像を考える」とその最終日に藤縄善朗市長、根本祐二氏、工藤和美氏を招いて開催されたシンポジウム(9月14日)。学生や市民のみならず多くの市役所職員や市議会議員にも成果を発信した

老朽化や高齢化を前向きな「新しい公共」の場に

自治体の財政問題についてはしばしばコストカットなどのシビアな提案が中心となり、市民の共感を得られにくいこともあるが、ここでは財政問題と空間イメージの提案を同時に行い、それらを全て公開とすることで「縮小」という課題に対し主体的に、かつポジティブに取り組む公共と民間の新たな連携イメージを形成しようとした。

公共施設の統廃合には住民の合意を得る必要があるが、従来の住民対象のワークショップは市民の声を拾いにくい、意見を言い難い、特定の参加者が場を独占するなど進行上の問題のほか、時間がかかり合理的ではないなどの問題も挙げられる。ここでは5回のワークショップに同一縮尺の模型による見える化、複数案を並列させ投票によるランキングというゲーム的感覚を取り入れること、ワークショップを反復することで背景も含めた問題の共有を図ること、などを通じて、生産的な公開プロセスの可能性を示した。

鶴ヶ島プロジェクト

2012年度東洋大学建築学科総合設計演習

担当 藤村龍至 武井誠 (非常勤講師)

設計アシスタント 畑克敏

学生アシスタント 大山宗之



図9 渋谷ヒカリエにて行われた展覧会

「公共建築から考えるソーシャルデザイン・鶴ヶ島プロジェクト2012」6日間で3,600人の来場者を集めた